

<前回> 後期オリエンテーション

### Ⅲ 東アジアの近代化とキリスト教思想

オリエンテーション

#### 1. 「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

1-1: 研究状況と問題点

1-2: 「アジアのキリスト教」の問題構造

#### 2. 「アジアのキリスト教」の諸問題

2-1: 近代化・貧困・開発

2-2: 伝統的宗教文化と家族

2-3: ナショナリズム

2-4: 宗教的多元性と宗教間対話

12/1

12/8

12/22

Exkurs ティリッヒ研究 1

1/5

ティリッヒ研究 2

1/12

#### 1. 「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

#### 2. 「アジアのキリスト教」の諸問題

2-1: 近代化・貧困・開発

2-2: 伝統的宗教文化と家族

2-3: ナショナリズム

#### 2-4: 宗教的多元性と宗教間対話

(0) 宗教的多元性と宗教の神学

・東アジアの宗教文化

伝統としての宗教多元性 (重層構造、遠近構造)

↓

諸宗教の相互交流 (相互影響)、共生あるいは対立

今年度の概論講義 (東アジア・日本のキリスト教)

・排他主義、包括主義、多元主義という類型論について

Aloysius Pieris, S.J., *Fire & Water. Basic Issues in Asian Buddhism and Christianity*,  
Orbis Books, 1996.

Today the academic magisterium in the West has developed this theology in terms of three significant categories: exclusivism, inclusivism, and pluralism. (154)

extra ecclesiam nulla salus

potentially or anonymously Christians

to each religion its unique role in salvation

I am embarrassed when I am asked in classrooms and in public forums whether I am an

inclusivist or a pluralist. The reason is not that I dismiss the paradigm that gives rise to these categories as wrong, but that I have found myself gradually appropriating a trend in Asia which adopts a paradigm wherein the three categories mentioned above do not make sense. For our starting point is not the uniqueness of Christ or Christianity, or of any other religion. (155)

The poor who form the bulk of Asian people, plus their specific brand of cosmic religiosity, constitute a school where many Christian activists reeducate themselves in the art of speaking the language of God's Reign, that is, the language of liberation which God speaks through Jesus.

the "cosmic" religiosity of the poor, this-worldly spirituality / their daily needs (156)

total dependence on God / they cry for justice / not secular, but cosmic / ecological / story  
(157)

The churches take refuge in a more convenient kind of uniqueness which they spell out in terms of the theandric (God-Man-Savior) model. This makes no sense in many of our cultures where it often evokes the image of one of the many cosmic forces than of a personal and absolute Creator-Redeemer. Moreover, this model, utterly untranslatable into some Asian languages, suffers also from an ontology before which soteriology (concern for liberation) fades into insignificance.  
(160)

where do exclusivism, inclusivism, and pluralism fit in here? If categories are needed at all in this new paradigm, my suggestion is the following three: syncretism, synthesis, and symbiosis.

*Syncretism* is a haphazard mixing of religion; something of the cocktail

That really does not exist among the poor, but is attributed to them by "observers".

*Synthesis* is the creation of a *tertium quid* out of two or more religions, destroying the identity of each component religion.

*symbiosis* of religion. Each religion, challenged by the other religion's unique approach to the liberationist aspiration of the poor, especially to the sevenfold characteristic of their cosmic religiosity mentioned above, discovers and renames itself in its specificity in response to the other approaches. What I have been describing as Christian uniqueness in the BHC experience reflects both the process and product of a symbiosis. It indicates one's conversion to the common heritage of all religions (beatitudes) and also a conversion to the specificity of one's own religion as dictated by other religionists. You may call it interreligious dialogue, if you wish. (161)

BHCs:Basic Human Communities

・野呂芳男『キリスト教と民衆仏教——十字架と蓮華』日本基督教団出版局、1991年。

「一つは、神学は人間の解放にかかわる、という確信である。伝統的に神による救いと  
言ってきた事柄は、解放以外の何ものでもない。そして、解放には幾つかの次元がある。  
政治的な解放、経済的な解放、社会的な解放、性差別よりの解放、非本来的な自己よりの  
解放などであって、実論論的神学はこれらすべての解放にかかわらばならない。そして、  
キリスト教と他宗教とのかかわりは、実存の生きる姿勢と深くかかわるところの宗教的な  
解放、真に深く自己を生かす宗教の中へと日々解放されて行くことと結合している。」(3-4)

「第三の確信は、民衆宗教こそ、その納得できない多くの慣習の奥底で、この愛を至上  
のものとしてあこがれ求めている宗教性であるということである」(4)

・山折哲雄『仏教民俗学』講談社学術文庫。

「この問題については、仏教学の側にもすくなからざる責任があった。なぜなら近代の

日本の仏教学は、あまりにも西欧の学問に秋波を送りつづけてきたからである。西方を凝視めつづけてきたというだけではない。海の彼方からばかり方法的な栄養をかすめとり、自己の存立基盤に思いをいたすにあまりにも乏しかったからである。日本の民俗的な土壌をそぎ落とし、分離することにばかり血道をあげてきたからである。その結果、日本の仏教学はいつのまにか地に足のつかない観念化の道を通り過ぎていたのである。」「仏教学よ、あらためて、民俗信仰が培ってきた知恵を呼び戻せ！」(6-7)

・ 韓国の「民衆の神学」

・ 金芝河「良心宣言」(1975年)(金芝河他『良心宣言』大月書店。)

長編バラード「チャンイルタム」の世界

「メシが天であります／天を独りでささえられないように／メシはわかちくらうもの／メシが天であります」(32)

宗教と革命、キリスト教と東アジア(東学)

↓

現代の東アジアにおいて、「民衆」とは？

貧しさ、貧しい者、という存在

### (1) ティリッヒの「宗教の神学」

(芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。)

#### 1. 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論

比較という作業：三位一体論の位置(多神教、一神教、三一神教的一神教)

*Systematic Theology. vol.1, 218-230.*

生の弁証法的運動(生ける神)、キリスト論

↓

キリスト教教義としての三位一体論

↓

比較を通じた理解の深化

キリスト教と仏教との比較・対話

1) 相違：神の国と涅槃、政治的共同体の象徴と個人的存在論的象徴  
倫理と神秘主義

cf. ヒック：人格／非人格

2) キリスト教における存在論的神秘主義的要素の発見

3) 宗教経験の類型論から要素論へ、そして構造論へ。

#### 2. 対話をめぐる諸問題

・ 対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313

対話の名に値する対話であるために

- (1) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。
- (2) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。
- (3) 共通基盤(common ground)の存在。 cf. common basis
- (4) 相手の批判に開かれていること。

cf. ハーバーマスの普遍的語用論 (Universalpragmatik)

コミュニケーション的言語使用の成立条件 (妥当請求) :

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

(Habermas, 1970/71, 81)

理想的発話状況 (die ideale Sprechsituation) とその先取り (終末論的構造)

互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……

真理の合意説

Jürgen Habermas, *Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie* (1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984, S.11-126.

Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.

Wolfgang Pauly, *Die geschichtliche Entwicklung religiöser Deutungssysteme. Die Erkenntnistheorie von Jürgen Habermas und ihre theologische Relevanz*, Saarbrücken, 1989.

Martin Jay, *The Dialectical Imagination. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973.

Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.

・対話の意義 (何のための対話か?) あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解、現象学と解釈学

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解→自己のユニークさは出発点ではなく、  
対話の過程で発見されるもの。

・対話の主体

個人／共同体／思想 → 科学と宗教の対話の場合

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で

解放の神学、あるいはキリシタンの場合

基礎的共同体 (Pieris, the basic communities)

組、講 (狭間芳樹「近世における民衆と宗教——キリシタンと一向宗」、  
芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房)

現代日本、現代の東アジアでは?

スピリチュアリティ・個人主義以降の共同性

↓

個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。

人格と共同性

### 3. 啓示史

- ・ gradual revelation (漸進的啓示、Gregory of Nazianzus)、二段階あるいは三段階
- ・ 原啓示(Ur-, Grung-)と救済啓示(Heils-)  
ルター派的神学の伝統(？、古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』ヨルダン社)

Paul Althaus

- ・ 啓示史(The History of Revelation. ST1, pp.132-144)

original	/	dependent
final, center		preparatory, receiving
キリスト		旧約(イスラエル)、教会

- ・ 啓示は歴史的である。

cf. Offenbarung als Geschichte (Pannenberg)

この連関において、諸宗教の神学的評価は可能にある。

啓示の歴史から宗教の歴史へ(啓示と宗教の相関性)

啓示の準備と受容の歴史としての宗教史

基準(意味付与原理)としてのキリストの出来事

### (2) 土着化論と接木

#### 1. 旧約聖書から新約聖書へ、イスラエル史の規範性

これとの類比で諸伝統が評価・解釈される

#### 2. コーンンの解放の神学：黒人の宗教経験と聖書、イスラエルと黒人

James H. Cone, *God of the Oppressed*. The Seabury Press, 1975.

Having described the two sources of Black Theology (black experience and Scripture), it is now important to distinguish both sources from their subject or essence, which is Jesus Christ. The subject of theology is that which creates the precise character of theological language, thereby distinguishing it from other ways of speaking. By contrast, the sources of theology are the materials that make possible a valid articulation of theology's subject.

Jesus Christ is the subject of Black Theology because he is the content of the hopes and dreams of black people. (32)

#### 3. 旧約としての武士道

「私は、神はすべての民族や国民——異邦人であろうとユダヤ人であろうと、キリスト教徒であろうと異教徒であろうと——と「旧約」と呼んで差支えない契約を結ばれた、と信じている。」(新渡戸稲造、佐藤全弘訳『武士道』教文館、29頁)

「余輩も新渡戸稲造氏がその著書で説きしと伝えらるるごとく、武士道は神が特に日本に賜わりたる旧約なるべきを信ず」(植村正久「武士気質」、『植村正久著作集 第一巻』新教出版社、413頁)、「しかれどもわが国には幸い武士気質なるものの存するあり。確かにキリスト教を待つ旧約たる資格を保てることを疑わず」(414)

#### 4. 接木論とその危険性

- ・ 武田清子『異端と背教——伝統的エトスとプロテスタント』新教出版社。

・ 「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみなら

ず全世界を救ふの能力がある、今や基督教は欧州に於て亡びつゝある、而して物質主義に囚はれたる米国に之を復活するの能力が無い、茲に於てか神は日本国に其最善を献じて彼の聖業を扶くべく要求め給ひつゝある……」(内村鑑三「武士道と基督教」1916年)

・問題点：

(1)何を「旧約」的な位置づけのものとするか

伝統的な宗教文化のどの層、どの領域を選ぶのか。

武士は適切な選択だったのか。民衆宗教への蔑視？

ピエリスの言う cosmic religion の評価、民衆宗教に意義

民衆宗教は、世俗化とデーモン化の危険を内包しているが、民衆の宗教性こそが、諸宗教の基盤である。

(2)イスラエル史の規範性からの逸脱によるデーモン化

イスラエル史(旧約)に自らの宗教文化を代置する

ドイツ的キリスト者(ゲルマン神話)→純血とユダヤ人の排除

海老名弾正の神道的キリスト教

「此の五箇の魂(クリスチャン魂・日本魂・教会魂・人類魂・宇宙魂)はたしかに一つである。何れも生命と勝利と進歩の魂である。其根本をいへば是れ実に神の霊である。……『太初に道あり』……其『ことば』道、即ちロゴスである。……之に生命あり……万物を生かし天地人生を指導す」(海老名弾正「予を慰むる五種の魂」『新人』1905年、吉馴明子『海老名弾正の政治思想』東京大学出版会、1982年、193頁)

↓

日本宗教史とキリスト教史との接続による、神道のキリスト教的正統化

帝国主義的膨張政策(進歩)との承認

イスラエル史はキリスト教のデーモン化・逸脱に対する外的な基準となる。

(3)「接木」という表現の適切性

内村鑑三の接木論の意図とその表現とのずれ → では？ 地平融合？

5. 日本のキリスト教：愛国精神と国粹主義への対応という二つのモチーフの交差

cf. 北森嘉蔵「日本のキリスト教」(1963)

「日本のキリスト教」というような言いかたそのものが果して成り立ち得るものかどうか(1)、「日本におけるキリスト教の現状」という程度の内容である場合には、「日本のキリスト教」という言葉よりも「日本におけるキリスト教」という言葉あたりが適当であろう」「キリスト教宣教の対象として一つの特定の国や民族が考えられる場合」「キリスト教にとっては外延的な意味をもつ」「むしろ「日本におけるキリスト教」という言葉にすべきであろう」(2)、「キリスト教が日本にまで到来しても、キリスト教の内容そのものは何らの影響をも受けない」、「ギリシアのキリスト教」「キリスト教とギリシアの出会いには、単なる外延的な意味以上の、内包的な意味がキリスト教にとって考えられる」「単に宣教対象にとどまらず、キリスト教の主体的な体質形成に参与した」「キリスト教の正統的な教義形成」「三一神論とキリスト論」(3)、「キリスト教」とは、旧新約聖書のメッセージが正統教義の媒介によって形成されたもの、「同本質」「という概念規定は、典型的にギリシア的である」(4)